

探りを入れるだけのひと言のつもりで言ってみた。しかし同時に、夕食の片づけをする雪乃の動きが不自然に止まったような気がした。

「ああ、敦士くん。最近学校に行けとん？」

「あっくんがな、あっくんのおじいちゃんは、澤村雄一やって言うん。うちのおじいちゃんと一緒やって言うんやわ」

洗い物をする手はぎこちなく動き始めるが、母からの応答はない。やっぱり私の知らない何かを知っている、そう感じた。

「そんなわけないわな。同姓同名なんやろ。こんな小さい島でも、そんなことあるんやな」

ぎこちなく笑いかけながら、自分を誤魔化すように食べ終わった食器を運ぶ。雪乃の明確な答えがほしかった。

「死んだ父さんはきょうだいなんかおらんいうて言よったから、もしそうやったら、私とあっくんはお母さんの違うきょうだいってことになるもんな」

口にしたくない言葉が流れ出す。早く止めてほしかった。早く答えてほしかった。そうじゃないって、言っほしかった。

「お父さん、ええ人やったんやもん。そんなことあるわけないわな」

今にも泣き出しそうになりながら、どうして答えてくれないの、早く何か答えて、と心が叫ぶ。

「おばあちゃん」

ひときわ強く発した雪乃のひと言に、美海は息を呑む。

「おばあちゃんと話してみ」

蛇口から流れ出る水を見つめたまま、ゆっくりと、諭すように母が言う。

母の背中を見つめる目が涙で滲んでいく。すぐにでも雪乃の背中に頭を押しつけたかった。その背中にすがりついて泣き出したかった。違うよ、と言って抱きしめてほしかった。

両手を握りしめ、奥歯を噛みしめる。次の声が出せない。今まで信じきって見てきた周りの大人たちが、どす黒く滲んで見えた。

逃げ出すように、居間にいる祖母に駆け寄る。できるだけ平静を装い、つくり笑顔で話しかける。

「なあ、おばあちゃん」

「ん？どした？」

やっとの思いで声を絞り出す。

「おじいちゃんと、お父さんのことなんやけど」

言ったとたん、美海は、節子の表情がこわばったように見えた。やっぱりおばあちゃんも何か知っていると感じる。

「……今日あっくんが、同級生の小野寺敦士くんが、おじいちゃんが澤村雄一やって。おじいちゃんが私と同じ澤村雄一やって言うたん」

「——」

「島に同姓同名の人がおったん？」

節子は答えない。テレビ画面を見つめる目は焦点が合っていない。

「お父さんはひとりっ子やったんやろ。もしおじいちゃんが同じやったら、あっくんと私はきょうだいやんか」

「そうやない」

刹那、節子はきっぱりと答え、美海を見つめた。

「そうやないんや、美海」

「ほんならなんであっくん、あんなこと言うたん？あんな嘘ついたん？」

つくり笑顔が、笑顔でなくなってしまう。

「それは……」

「なんで？おかしいやん、おばあちゃん」

悔しくて、悲しくて、涙が抑えきれない。

沈黙の時間が流れる。騒々しく雨音が叩きつける。テレビの音が寂しく部屋に響く。

後ずさりし、節子とも雪乃とも間合いを開け、美海が佇む。感情が溢れ出す。

「なんで？どうして？どういうこと？……何か言うて。なあ、お母さん！おばあちゃん！

みんな、みんな勝手なことば一で。子どものことやん、私の気持ちやん、何にも考えとらんやん」

そう言い放ったかと思うと、美海は部屋を飛び出した。

「美海！」

雪乃の制止を聞くことなく、その気配は玄関から消えていった。

雨が強く降りつける暗闇へと消えていった。

後を追い、豪雨の夜に雪乃と節子が飛び出す。

「おばあちゃんは家におって。どっかから電話があったら連絡して！」

そう言い残された節子は雨に打たれながら、茫然と立ち尽くした。

もし美海に何かあったら――

一度ならず二度までも――

そう思うと、いても立ってもいられなくなる。が、今はどうすることもできない。これまで生きてきた人生をふり返っては、悔いることしか思い浮かばない。今までの罰が当たったのね、と自分を責めるしかない。

雪乃は強い雨に打たれながら、辺りを小走りに探す。降った雨が道路を川のように流れていく。人の気配はどこにもない。

「美海！美海！」

出す声は雨音でかき消され、どこにも届かない。あの日もこんな、時化た日だったことを思い出す。もし、美海に何かあったら、よりによってどうしてこんな日に、余計なことばかりが頭をよぎる。

いつも見る小さな川が濁流となっていることが、音だけで分かる。明かりはない。探そうにも探しようがない。だが、探さずにいられるわけもない。

雨を避けられる場所を考える。港の待合所、いくつもある空き家の軒下。

「美海！美海！」

少し先の学校まで行ったのだろうか。それとも人気のなくなった教会か。公民館に明かりを見つける。避難所として開設されているのだろう。

「すみません、うちの美海来とらんかな」

知り合いの消防団の若者の顔が見える。

「どしたん？」

「美海が家を飛び出してしもうて」

「美海ちゃんが？この雨の中にかいな」

申し訳なく返事をする、分かりました、と言って、仲間の団員に連絡してくれた。しばらくして、どこかから低く重い地鳴りが腹に響く。

「あら、こりゃーどっかで地滑りが起きたな」

タイミングの悪いときに起きたものだと思いますが、若者は雪乃に、公民館で待機しててください、と告げて外へ飛び出る。

「私も行くわ」

「危ないから、二次災害になったらいかんから、ここにおって」

無理矢理制止させられ、仕方なく雪乃はずぶ濡れのまま座り込む。

慌ただしく人が出入りする。近所の知り合いもいれば、顔見知りの団員も駆けつけてきた。

「地滑りの方は大丈夫やって」

防災無線から連絡が入り、ホッとするが、美海の安否が確認されたわけではない。一度立ち上がった体を、またいすに下ろす。

気が気ではない。

父親のことをもっと早くに言っておけばよかった、と思う。だがそれは、自分の口から言うことはずっと憚られた。自分が言うことではないと思い続けてきた。しかし、美海の気持ちになれば、誰から告げられることも同じではないか。むしろ、母である自分が言ってあげるべきではなかったか、と後悔をする。後悔が本当の後悔になってしまわないか、それだけは、と強く深く念じる。

突然、手にしていたスマホが鳴る。明るく照らすスマホの画面に、「自宅」の文字が浮かぶ。おばあちゃんから、と通話ボタンに触れる。

「もしもし——」

＊

翌朝、前日までの梅雨空が嘘のように青空が晴れわたる。ようやくの梅雨明けだ。風もなく、海も凪いでいた。

前夜の豪雨は各地に崖崩れなどの被害を及ぼしたが、人的な被害は免れた。

美海が見つかったのは、家を飛び出して数時間後だった。家に電話が入ったことで無事が確認された。電話の相手は、敦士の母、佳代。豪雨の中、美海が向かった先は敦士の家だった。驚いた敦士と佳代は家に入れ、着替えさせ、落ち着かせた。敦士には思うところがあったが、それは佳代には言わなかった。大雨のなか帰すのも危険だったし、明らかに様子がおかしかったため、佳代がそのまま留め置いた。そしてその